……「紅の旗」創立110周年記念誌　”思い出の記”〈ああ、我らが青春の日々よ〉　より……

終戦のあとさき　６０年消えぬ記憶

昭和22年 四年終了 第二高等学校入学　小山田　恵 (※1)

昭和20年中学３年生になったばかりの４月始め私たちは石川郡石川町に飛行場造りに駆り出されて大きなリュックと寝布団を背負って汽車を乗り継ぎ夕方石川に着いた。お寺に泊り作業現場の澤田村まで毎日一里ほどの道を歩いた。れんげの花咲く田んぼ、猫啼橋が今も頭のどこかに残っている。

７月はじめに飛行場が完成して帰宅したが私は慢性腎炎という診断で学校を休み家で寝ていた。家にあった家庭医学書を読んだら不治の病で10年くらいで尿毒症になって死ぬと書いてあった。戦死とか空襲爆撃で死ぬのが日常であった時代だから死ぬことにさほどの深刻感はなかった。

少し体が良くなってから学校に出て行くと同級生は海岸で敵を迎え撃つ塹壕掘りに出ていた。それに耐えられない残留組に加わって原釜の塩作りに従事。塩田の砂に海水を撒く、成果の見えない空しい作業であった。

終戦の勅語を聞いた夕方隣に住む二人の先輩から敗戦で予想される悲惨な事態を聞きこれから生きていくには学問しかないと語り合った。

一ヶ月ほど過ぎたある日相馬出身の原という牧師が若い米兵を連れて学校に来て講演した。米兵は民主主義について話したが今も強く記憶に残っているのは原牧師の話で『血は水よりも濃く宗教は血よりも濃し』という格言である。原さんは戦時中米国にいたが牧師であったため迫害から免れ何十年かぶりに郷里に帰った。故郷に対する思いとキリスト教のありがたさを説いたのだと思っていたが最近 血は水より濃し の英訳に

Blood is thicker than water　(血筋は争われず他人より血縁のつながりの方が強い)

のほかに

Not where one is bred but where he is fed　(生まれたところではなく育ったところ)

というのがあるのを知ってから原牧師が話した真意の奥深さを思うようになった。

21年２月頃県内中学校の弁論大会が浪江町であって私は岩崎敏夫 (※2) 先生に連れられて出場した。当時私は岩崎先生に誘われて放課後相馬藩に関わる資料の写本をしていたので演題は “相馬藩の復興と富田高慶” とした。高慶は文化11年相馬藩士の次男として生まれ17歳の時江戸に出て儒学を学んだ。当時の相馬藩は天明以来の度重なる凶作で田畑は荒廃し人口も収納米も３分の１ほどに減少した。高慶は国を興す学問の必要性を痛感し野州芳賀郡物井村にいた二宮尊徳の門を叩いたが断られ半年後ようやく入門が認められてやがて二宮４代門人の筆頭として二宮仕法の普及に奔走した。相馬中村藩に二宮仕法が実施されたのは彼が入門して７年後の弘化２年からであるが明治になり廃藩になるまでの27年間に相馬の復興がほとんど完成した。

高慶の性格は謹直沈毅、己に厳しく外に対して寛大、名利に恬淡で仕法施行の27年間藩の禄を断り借地を耕作して自活した。思想の基本は尊徳の一円融合で報徳論を至誠、勤労、分度〔実績の分析に基づく経営計画〕推譲〔人を推戴し自らを譲る〕の４項目にまとめたのは高慶であったとされる。以上は最近本校の寺脇正博 (※3) 先生から送ってもらった相馬市史に書かれている岩崎敏夫先生の著述からの抜粋であるが当時私が感動した事項はこの文章には記されていない。

私の記憶では高慶が入門を許されるまで何日間か尊徳の門前に座して食を断ち夜を徹して許しを請うた。ようやくその願いが適って初対面した時尊徳は無言で茶碗の中に水を入れ、その中心に箸を立ててかき回すうちに水が回ってくるのを高慶に示してこれがわかるかと問うた。高慶は即座に人の上に立つ者のあり方だと答えたという内容が私が写本したものの中にあった。

私はそれを主材として戦後混迷している日本の復興に必要なのは民衆をリードする指導者の情熱と率先垂範であり、個人の生き方としては自分自身の中にしっかりとした哲学的思想が必要だという内容であった。入賞はしなかったが数日後、草野心平の雑誌同人で狩宿さんという方から手紙が来て、弁論の技量不足で賞には入らなかったが確かな史実に基づいて自分の考えを述べたことは正しい。これからもそれをしっかり守って頑張るようにと書かれていたのが有難い教訓として覚えている。

私は戦後の混乱期にいち早く勉学に励んだおかげで中学４年生で第二高等学校 (※4) に入ったから相馬中学校の修了証書も卒業証書もない。

昭和 22 年戦火で焼け爛れた仙台に出て以来故郷を離れてはや 60 年。挫折と錯誤の繰り返しの生涯であったがそんな時自らを慰め励ましてきたのは相馬中学の復讐歌であった。

馬陵城頭　月冴えて　宇多の流れの　澄める時
勇める健児　雪辱の　誓いぞ固く　胸に秘む

年を重ねるほどに郷里を思う心が深まるのはあの土地特有の、土、水、空気と動植物によって作られたＤＮＡを持つ者の宿命なのかも知れない。

（※１）中学４年から第二高等学校合格　馬城会員名簿には、中 47 回、昭和 23 年（1948）年卒で載っている　鹿島出身

（※２）中 25 回　昭和２（1927）年卒　中村出身　〈昭和 19（1944）年～昭和 31（1956）年まで、相馬中学～相馬高校教諭〉

（※３）高普 20 回　昭和 43（1968）年卒　中村出身

（※４）（旧制）第二高等学校。1887 年仙台に設立、1950 年廃止。当初、理科、文科よりなる修業年限３年。東北大学の前身校の一つ。全国で５校のナンバースクールの高等中学校の一つ。東京には旧制一高、京都には旧制三高。

（転記　村山）